

陸自駐屯地紹介シリーズ 第55回

ミグ25事件の記憶 函館駐屯地

第28普通科連隊他

駐屯地シリーズ編纂委員会

はじめに

冷戦たけなわの頃、津軽海峡を挟む地方は、特に北部方面隊地域へ戦力推進のための防衛上重要地域として陸上自衛隊では幹部各階層で戦術勉強が為されていた。その階層に至ることのなかった者でも皆この地域が重要なことは十分認識していた。

もしこの地域が遮断されれば北海道への兵力・兵站推進が不可能になり、北海道内での防衛戦闘は立ち枯れることと必至で、しかもこの海峡には上陸適地が連なっているからである。

海峡は、いづれも国際連合海洋法条約の領海12海里(18km)の範囲内にあり、津軽海峡は完全領海と主張することができのだが、同じ条約の別条項に規定する「公海と公海」を繋ぐ海峡では沿岸国の交通を確保するという考えを承けて、日本が自発的に領海幅を短縮し海峡の航行帯を公海として国連に登録している。

函館は函館湾に向かって開けた都市

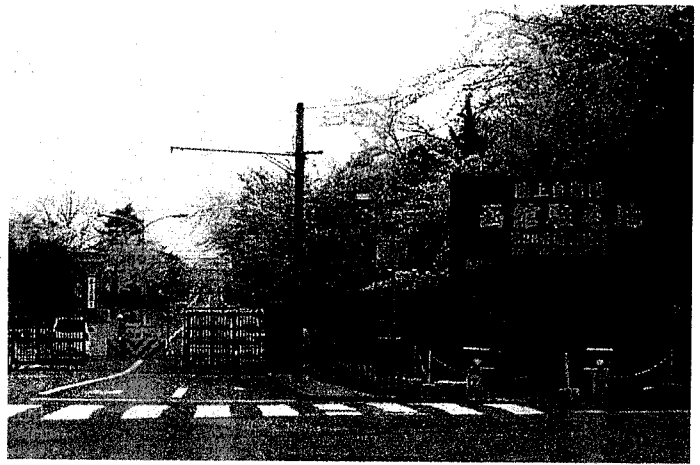
で、江戸末期北前船の頃、通商拠点が

西の松前からこの函館に移って以来長く北海道最大の玄関口であり、航空交通が発達した現在でもその姿を色濃く残している。自動車用青函トンネルを計画しても排気ガスを排出するには技術的困難があり、車両は船舶輸送に拠らざるを得ず函館港の重要性はなお残る。また現在でも鉄道は函館本線の拠点であり、国道は函館から室蘭・苫小牧へ、或いは小樽・札幌方向へ5本延びている。

市は近年人口が減少しつつあるがなお道内3番目の人口を擁し、平成22年初頭に約28万、道南最大の都市である。函館山、五稜郭、湯ノ川温泉、修道院など観光も人々を集めている。

陸上自衛隊函館駐屯地

この函館市の広野町6丁目に陸上自衛隊函館駐屯地がある。東西を函館競馬場、函館競輪場に挟まれた位置である。



函館駐屯地

に切り替えた。5分余りで駐屯地沿いの道路を走り始め、敷地の広さ、装備車両等の多様さを感じているうちに鋭角に方向変換しすぐ営門前に着いた。

門標の外に立ち見回した。広々とした隊内が広がって、正門から真つ直ぐに広い道路が走っている。この道路こそ我が同期生大北太一

羽田空港から約1時間20分で函館空港に着く。西南西から東北東方向に走る3千以上の滑走路があり、ジャンボ機の離着陸が可能である。しかし駐機場には大型機は見あたらなかった。到着したのは夕暮れ時、小降りだった雨が市内案内資料などを探している僅かの間に雪に変わった。5分ほどでホテルに着いた。10階建てながら客も少なく閑散としていた。

翌朝、路面は至るところ凍り付き、バス停までの歩行さえ危険でタクシ

郎元中方総監陸自64の思い出深い場所であり、取材前夜電話して暫し往時の思い出を聞いた場所である。(詳細後記)。道路左側の警衛所で広報室への案内を請うと近くの古めかしい小ぶりの平屋を指し示された。

駐屯地沿革

広報室長清水薫2尉に対応して頂いた。この場所は陸軍時代函館要塞を守る重砲兵大隊の演習場であった。昭和25年8月10日警察予備隊発足に伴い、

同年10月14日第2連隊第3大隊がこの地に移駐、当初は現駐屯地の東側にある函館競馬場の厩舎を仮隊舎としていたと伝えられている。26年3月30日には真駒内で編成された第822救急車中隊がこの地に移駐した。また同年5月1日及び27年1月20日の2回の部隊名改称を経て第5連隊第3大隊となった。

その後部隊配置変換などで駐屯地主力部隊は第47特科大隊（その後第106特科大隊に部隊名改称）、第2新隊員教育隊、第101教育大隊と変遷したが昭和37年8月3日、滝川で編成された第28普通科連隊が移駐し、以来函館駐屯地の主力部隊となって現在まで続いている。

駐屯部隊

第28普通科連隊

連隊長は田邊政文1等陸佐陸自81で函館駐屯地司令を兼ねている。札幌市南区の真駒内駐屯地に司令部がある第11旅団の隷下部隊で、道南の渡島、檜山、後志の3支庁、2市18町1村の広大な地域を防衛担当区域とする連隊であり、連隊本部、本部管理中隊、高機動車化中隊、96式装輪装甲車化中隊からなり、迫撃砲戦力、対戦車砲戦力をも備えている。

この連隊は移駐以来道南の広範囲を受け持ち隊区として、数多くの災害派

遣に出動した履歴を持つている。

特に昭和46年7月の東亜国内航空ばんだい号の横津岳墜落事故ではヘリコプターから墜落場所を発見し、陸上からレンジャー部隊を投入、引き続き遺体の収容に力を発揮し、遺体を自衛隊内施設に一次安置したという出動例がある。

平成5年7月の北海道南西地震では壊滅状態になった奥尻町に出動し人命救助や行方不明者捜索に当たった。当初奥尻村長（当時）が真っ先に出動した奥尻島の航空自衛隊部隊について「食事や宿泊所を用意せねばならず却って足手纏いだ」と発言したと報道され、災害に心を痛めていた自衛隊員の憤激を買った。結果的に通常どおり陸自部隊の派遣となったが、当時は未だ自衛隊が出動にあたっては完結の態



北海道南西沖地震（奥尻島）へ出動

勢で、被災地に負担をかけることを知らなかったたのであろう。しかしながら当時の報道には無知よりも悪意を感じた。

また当連隊移駐以前の第106大隊は、昭和29年9月27日に起こった洞爺丸遭難事故で遺体収容に出動し、遺体が駐屯地内の施設に安置されたという。自衛隊にとっては全くの余談であるが洞爺丸船長の奥様は刺すような冷たい視線の中、船の指揮者の伴侶として逃げることなく遺族にお詫びして歩いたと聞く。凜たる日本人の振る舞いを記しておきたい。

連隊の演習にあたっては北に約50km離れた駒ヶ岳演習場、東北東に約280km離れた北海道大演習場までの移動が必要である。連隊挙げての演習に向かう行進の様子はさぞ壮観であろう。

その他

- 函館駐屯地業務隊
 - 第332会計隊
 - 第314基地通信隊函館派遣隊
 - 第120地区警務隊函館派遣隊
 - 第11後方支援隊第2整備中隊
 - 第3普通科直接支援小隊
- が駐屯している。

駐屯地司令表敬

取材申請の段階ではご多忙なことを承知していたので駐屯地司令への表敬

は遠慮していたが、広報室のご配慮で時間を取って頂けるとの連絡を承け、つくづく借行社ならではの厚遇を感じた。玄関入ると掲示用ガラスケースがあり、駐屯部隊の演習や行事の写真が掲げられている。



現地現物による戦闘指導中の田邊連隊長

部隊は益々多忙

表敬の場は2階の連隊長室であった。壁の飾り棚の上の本立てに薄い雑誌が並んでおり、おや？と思ったが、後に連隊長が一冊を手に取りられたのはやはり「偕行」であった。平成21年1月号から全駐屯地に贈呈を始めて以降の全冊が揃っているとされる。編集に携わる一員としての喜びは理解願えるであろう。

最初に伺ったことは情勢の変化に伴い連隊の役割にも変化が生じたことについてである。過去の「北方重視」の

この青函地区を防衛する任務に加え、他方面転用も考慮され始めていることであつた。詳細は控えたい。

次いで部隊の忙しさについて触れた。「国際貢献」と云う新しい任務が加わり、失敗することは諸外国から侮りを受け国威の低下を招く。現場に立つには精鋭な部隊として任務に当たらなければならず、待機部隊指定を受けると十分な訓練が必要である。従来防衛行動に備えた訓練とは内容が異なる事が多く、訓練所要時間も多い。従来型訓練との双方を所望の練度まで鍛えるためには隊力も時間も窮屈になつてお話を話の端から感じ取つた。だが連隊長は「災害派遣には絶対手を抜かない。また部外協力も出来る範囲で続ける。郷土だから」と断言しておられた。

函館駐屯地部隊の歴史について語り合つた。自然、話題はミグ25事件に行き着いた。当方からやや強引に持ち出した話題である。連隊にはもう当時在籍していた隊員はいない。残る記録について聞いてみた。門外不出の史料ならば閲覧を拒まれるのは何等不満はない。しかしながら本場に記録は無いようだ。残念であつた。ただ当時の函館連隊は全員がこれ以上ない立派な行動をしたと語り継がれていることを強調され、今も隊員の誇りとなつてい

のことであつた。

地域協力

話題は地域への協力に及んだ。現在函館市に限らず地域興隆の方法を模索中であり、観光開発をその有効な方策としている。函館も雪を資源として中国、韓国、台湾から観光客を呼び込むキャンペーンを展開しているが、これに関し雪まつりなどの協力をしており、連隊長はその午後、冬フェスティバル準備作業の現場に激励に行かれるとのこと、作業中の隊員の士気も上がることであろう。函館港まつり、函館五稜郭祭にも協力している。伺いながら自衛隊本来の訓練と地域協力の調節を図る連隊首脳部の苦心のほどを偲んだ次第である。



連隊長は「正しく強く」「遅しく」「仲良く、心さわやかに」という一見優雅な言葉を三つ挙げて要望事項としておられるが、心の内の統率方針はもつと厳しく激しいものではないだろうか。失礼ながら雰囲気と隊員から聞く日頃の士気統率ぶりから、勤務への意気込みを感じたところである。

夢中になつて何つて居る間に予定の時間を超過して、外で決裁待ち、指導を受け待ちの幕僚諸官が待機していたらしい。翌日は第1中隊の冬季訓練検閲ゆえ最後の統裁計画の詰めを行う時程である。心ないことをした。退官して15年、ヤキが回つたものだ。

隊内見学 伝えられる歴史

広報室の廊下続き10分程の所に駐屯地資料館がある。入ると一種独特の重々しさがある。歴史を伝える品々が納められているためであろう。陸軍時代の資料とともに函館戦争の戦闘経過と榎本武揚、土方歳三の写真が掲げられている。いつものこと、土方歳三は何故こんな立派な顔をしているのであろうかと思う。現在にも通用する美男子で、洋装に身をかため、やや笑みを湛えた白皙の顔は洛中で白刃を振り回した人物に似つかわしくない。歴史の流れに諦観を感じながら、共に各地を戦い冥界に旅立つた同志への節義を貫



土方歳三

いた男の心を感じる。榎本武揚のように明治以降も活躍し続ける生き方は出来なかつたものだろうかと思ふことを考へる。個人的感情を許して貰えるなら土方歳三は大好きな歴史上の人物である。

連隊本部の前に和服で幼い子の頭を優しくなでてもらわれる乃木大将の銅像がある。明治24年3月の夜、雪の金沢で乃木將軍から激励を受けた一人の辻占売りの少年は発憤して日本一の金箔工芸家今越清三郎に大成し、金箔工芸史上に残る偉業を果たす傍ら社会福祉に貢献し、昭和49年逝去されるまで乃木將軍への報恩の志を忘れることはなかつた。この史実に感銘した柳生市郎



乃木大将と辻占売りの少年像



積雪地の部隊機動

氏が昭和34年制作を依頼し自宅の庭に設置してあったが昭和40年3月函館駐屯地に寄贈したもので、像の題文字は今村均大将。昭和の仁将が明治の仁将の像の為に心を込めて筆を揮ったと言える(駐屯地説明板から)。駐屯地外であるが函館には乃木神社分社もある。これも乃木大将を尊崇する方が自宅敷地内に神社としていたが乃木神社に寄進し函館分社となったという。

明日は中隊検閲

隷下中隊隊舎は屋根壁付きの渡り廊下で連接され更に所々扉で仕切られている。酷暑の外気を遮るためである。

第1中隊隊舎を居室内まで見せて頂いた。検閲受閲準備で大わらわであった。冬季検閲はスキー機動が欠かせない。室内ベッド上には背囊・弾帯・防寒外被・防寒手袋・防寒面覆い・銃覆い、飯ごう覆いなど、廊下には手入れされたスキーやアキオ(雪ソリ)等が用意されている。要所は白色の布で覆われている。背囊入り組み品を想像してみたい。シャツや靴下など定められた定数が小さく畳まれ、防水ビニールに覆われて納められている筈である。非常用食料も必ずあろう。積雪地の行軍は驚くほど体力を消費し、空腹になった時は体が動かなくなる。精神問題ではなく、筋肉中のエネルギーの問題である。このような状態に落ちたとき、ほんの少しの糖分補給が驚くほど体力気力を回復する。むしろエネルギー不足になる前に少しずつ糖分摂取を繰り返すことが賢明で精神論を振りかざすのは愚の最たるもの、ベテラン隊員はそのことをよく知り、自分に合ったエネルギー源を忍ばせていると想像する。酷暑を生き抜き、遭難しない智恵である。受閲中隊の健闘を心から祈った。

歴史の彼方に……

編集注 昭和51年9月6日、ソ連の当時の最新鋭戦闘機ミグ25の操縦士バレンコ中尉が亡命目的で越境、

函館空港に着陸し、ソ連軍が機体奪回のために侵攻するのではないかと噂された。

冒頭に書いた警衛所前から真っ直ぐに走る道路に立つてみた。同期生大北太一郎氏から感慨を込めた電話で聞いた。彼が「ミグ25奪回のためソ連が進撃しつつある……らしい」との報で第一線中隊として発進用意を命ぜられ整列した場所である。

中隊には発進要員の指定を巡って混乱が起こった。後方支援のため待機を命ぜられた隊員が「彼が行くのに何故俺が残らなければならないのか」、言外に「この俺があいつにひけを取ると上は評価しているのか。我慢ならん」。隊員が自らの精鋭さに誇りと自信を持ち、それが生命の危険が考えられる非常の場合にも些かも消えることが無かったことを語っている。連隊長が問題を解決した。「大北中隊の後方支援は他の中隊にやらせる。全員連れてゆけ」

別に広報室長から聞いた話である。日頃の服務指導・身上把握で、病身の母を擁していると知られていた陸士(兵)があった。残留要員に指定された時「母は喜ばないと思います」勿論出動人員に加わった。まだ自衛隊への認識も「米軍の傭兵」「いざという時には逃げ出すだろう」などと悪意の擲

撃があつて間もない頃の任期制隊員のエピソードである。聞いていて筆者は姿勢を正さずにはおられなかった。更に大北氏から聞いた事がある。出発準備の間、中隊の「闘うための創意工夫」はさまざまいほどであったらしい。迫撃砲で直接照準が出来ないが、敵が我先に先んじて飛行場を占拠した場合、トラック上から射撃をしながら現場突入し制圧できないか、富士学校の正規教育では考えもしなかった工夫に真剣になっていた。



函館空港に飛来したミグ25 (函函蔵)

田邊連隊長に随行して冬フェスティバル準備現場に行っていた広報室長が戻ってきて「当時の講堂の中を見ませ

戻ってきて「当時の講堂の中を見ませ

んか」。その時高橋永二連隊長が全隊員に訓辞をした場所である。見逃す訳には行かない。

あの日連隊全員が講堂に集合を命ぜられた。既にミグ25の函館空港着陸を聞いていた隊員の中にはソ連の奪回行動に対する出動を予期した者もいたに違いない。立錐の余地もなかったであろう。連隊長は訓示された。「腕を拱いて見ていることは出来ない。命を連隊長に預けてくれ」。直接この訓辞を受けた先輩がたは既に退職しておられるが後輩に今も語るそうである。「体中が震えてならなかった」。勿論恐れではない。武者震いであつたという。

この事件については取材前にいろいろな資料を漁った。先ず公式資料の存在である。インターネットでは、事件収束後、何の故か一件資料を全て焼却せよとの指示が上層部から流れ、これに対して当時の陸上幕僚長三好秀男陸将33期が「辞職」を賭けて阻止しようとしたと記述があつた。時の首相は三木武夫氏、長官は坂田道太氏、事務次官は丸山昂氏であつた。真偽のほどは不明である。とにかく記録は現地部隊には残されておらず行動記録の細かいことは闇のままであろう。しかしながら事件を観察した記憶としては随所に残されているのではなからうか。

岡目八目と承知ながら事件が残した



ベレンコ中尉が亡命に使ったMiG-25P(同型機)

ことについて筆者の考えを述べたい。第一に規律で縛られていると聞いていたソ連空軍が実は辺境に対する配慮を欠き大きな綻びがあつたこと。第二に当時の我がレーダー網には低空から進入する航空機に対して弱点があり、発進した邀撃戦闘機は上空から低空の目標機を捕捉(ルックダウン)出来ないこと。第三に緊急不測の事態に対する我が国の政治は明確な命令を何一つ出せず、現場部隊は文書命令を全く受領していないという問題を露呈した。第四は陸自、特に現地連隊及び隷下中隊は実に見事に団結・規律・士気を維持し敢然として対応したこと。第五に安全保障上の大事件と認識し得ない出先官公庁から本質的でない干渉、例えば機体本体は不法入国の証拠物件

として検察が管轄を主張し、また機体は「密輸品」だとして税関へ出向き事情説明をしなければならなかつたこと(元航空自衛隊第5術科学学校長真下守空将補の幹部教育から)。これらを表敬の折りに筆者の考えとして連隊長に申し上げた。連隊長は穏やかな表情で黙って聞いておられた。

再度書くが、未だ自衛隊への認識が今日ほど進んでいない時代はこの事件は戦後唯一の臨戦態勢であつた。時の陸自現地部隊は見事に対処した。現代においても、陸上自衛隊は偕行社の先輩がたを嘆かせるようなことは決してしないであろう。その確信を函館の現地に感じて正直身体が震えた。そのことを今回の訪問記の最大の収穫としてお伝えしたい。また今も昂揚している。

終わりにしなけ

ればならない。ご多忙の最中時間を取って頂いた田邊連隊長及びご手配頂いた広報室長には心から感謝したい。付言すれば広報室長はいざ鎌倉の場合は連隊本部よりも第一線中隊で仲間と戦いたいと言っておられた。

文責 松村興延陸自64



「いざ出陣」精強第28連隊戦闘団